2017 年11 月 19日
聖書:第一テサロニケ5章16－18節　題:「感謝祭に感謝を考え・実行する」

序　論

●先週は、私たちがオハイオの日本人集会にお招き頂き、不在しましたが、Teaho Kang 兄のメッセージのご奉仕を始め、皆様が協力してご奉仕をくださったことを改めて感謝します。
●私どもも、オハイオ(シンシナティー)で、大変祝福されたご奉仕と交わりのときを持たせていただきました。その集会でのご奉仕は今回、今年の２月に続いて２回目となりますが、今後定期的にその集会でご奉仕する提案もなされています。どうかお祈りください。
●また、その直後でしたが、かおる先生の母が天に帰りました。そのことでは、皆様に祈って頂き、色々とご心配いただき感謝します。ギリギリでしたが、無事、土曜日早朝に羽田着、その日午前に持たれた葬儀に出席できました。来週火曜日夜に帰米します。
●さて、愈々、今週は、皆が楽しみにしている「感謝祭」ですが、「さくら」新聞の連載にも書かせえて頂いたように、最近、益々、「感謝祭」が、その名が表すような、本来の「感謝する」と言う意味と実践から離れて行っているように思います。
●「感謝祭」は、それ自体、聖書の行事、キリスト教の行事ではない。しかし、そこには、アメリカ建国当時に流れていた、聖書のスピリット、キリスト教のスピリットがあった。
●その意味でも、今日は、皆様とご一緒に、クリスチャンとして、「感謝」することについて聖書からメッセージを頂きたいと思います。
●聖書の箇所は、「感謝」についてのメッセージを含む聖句として、多くの人に親しまれているテサロニケ第一の手紙５章 16－18 節、特に 18 節です。

本　　論

Ⅰ. 第一に、神様は、私たちに「すべての状況において」感謝するべきことを求めておられることを見たい。

A. ここで、まず最初に心を留めるべきことは、聖書は決して「すべてのことを感謝しなさい」と言っていない。むしろ「すべてのことにおいて」「すべての状況において」感謝しなさいと言っていることである。

１．日本語の新改訳聖書では、この箇所が、「すべてのことについて」と訳されているので、この点が少し曖昧である。
２．しかし、英訳では“in all circumstances”、即ち「あらゆる状況の中で」と訳されている。これの方が、原語の意味をそのまま訳し出している。
３．即ち、ここでは、英語で言うなら、“Give thanks ***for*** all things”「すべてのこと***を***感謝しなさい」ではなく、“Give thanks ***in*** all things/circumstances”「すべてのこと***において***」、「あらゆる状況において」である。
４．私たちは、すべてのことを感謝できないし、するべきでもない。
　⑴先日、テキサスの教会で起こった銃撃事件。26 人の人が死亡。牧師の 14 才の娘も含まれていた。牧師は親として、そのことを感謝するべきなのか？　先日、英会話クラスに来ておられる一人の婦人が、ご主人の質問としてそのことを問われた。
　⑵「私は、クリスチャンとして、娘が殺されたことを感謝します」と言うことはできないし、神様はそのようなことを私達に求められているとも思わない。
　⑶娘が殺されたことは悲しいし、失望落胆するべき、更には怒りさえするべき事実である。それ自体は、決して感謝するべきことではない。
５．しかし、聖書、そして神様は、そのような状況の中でも、どんな状況の中でも、「感謝しなさい」「感謝の心を忘れてはならない」と言われるのである。
６．砂山(いさやま)節子という方のお話を何度かしたことがあるが、彼女は、ご主人とともに第二次大戦前、満州に渡っていた日本人また現地人の方々への宣教のために同地に渡り宣教師として働いておられた。しかし、ご主人は現地召集となり兵士として戦地へ。敗戦となり一旦は戻って来たものの、間もなく現地での共産軍との戦いに巻き込まれ、行方不明

となり、その後二度と会うことはなかった。その中で、3 人の幼い子どもを抱え、敗戦国民として外地で戦後の混乱の中を通らなければならなかった。何としてもまず食糧難からの飢えが彼らを襲った。一番下の男の子を栄養失調で失った。残された小さな二人の娘と共に、「無蓋車」と呼ばれる屋根の無い貨車に幾日も乗って、飢えと寒さと戦いながらやっとのことで、船で日本に帰るために港町に着いたときには、栄養失調と極度の過労から彼女の目はほとんど見えなくなっていた。その町でお医者さんに「あなたの目はもう見えるようになることはないでしょう」という診断を下されたとき、その診察室を出て、病院の廊下をヨロヨロと壁づたいに歩こうとする彼女の目の前は文字通り真っ暗であった。しかし、その時であった。神様は、彼女の心にあのいつも親しんできた有名な賛美歌を通して語られた。それは「数えてみよ、主の恵み」(Count Your Many Blessings, see what God has done, Count your blessings, Name them One by One)であった。彼女はその暗く、また動揺する心の中で、一つづつ恵みを数えだした。そのとき、彼女のうちに不思議な、そして新しい力が湧き出したのであった。やがて彼女は戦後の混乱期の日本に戻り、二人のお嬢様を立派に育てられた。

7．彼女は、ご主人を失ったことを、男のお子さんを失ったことを、ご自分の目が見えなくなったことを感謝したのではない。彼女は、そのような状況の中でも、今までの、そして今も尚頂いている神様の恵みの一つ一つを数えながら感謝したのである。

B.「すべての（あらゆる）状況」とは何か？

1．「すべての状況」とは、勿論、言うまでもなく、それは「良い状況」を含んでいる。

(1)「良い状況」、「順境」の中で感謝することは、いちいち言われなくても当たり前のこと!!」と人は思うかもしれない。しかし、これが以外にできていないのが現状である。

(2)その典型的例が、ルカの福音書 17 章１１－１９節に出てくる１０人のハンセン病(昔で言うらい病？)のような重い皮膚病にかかっていた人々の例である。

- ●そのような重い、絶望的病気から 10 人全員が奇跡的にイエス様によって癒しを経験した。恐らく、と言うか、言うまでもなく、10 人全員が大喜びしたであろう。
- ●それゆえ、その全員が「感謝」を捧げたことが期待される。しかし、その中で、実際に神を崇め、感謝を表わすために戻ってきたのは一人だけであったと聖書は記す。
- ●ここで大切なことは、彼らは、喜んだが、感謝はしなかったことである。
- ●多くの人はこの違いを余り気にしない。しかし、この箇所で、イエス様の態度とお言葉に注意を払うと、イエス様は、このことに非常にガッカリされたことが分かる。
- ●即ち、「良いよ、彼らが喜んでいれば、わざわざ戻って来て、神を崇め、感謝する必要はないよ」と言われなかったのである。
- ●「喜ぶ」ことと「感謝」することは関連することであるが、二つの別のことである。度々申しあげるが、「喜ぶ」ことは自己完結と言うか、自分の中で終わってしまってよい感情の所作、発露であるが、
- ●「感謝」は、その喜びを自分以外の誰かに伝え、表わすことである。
- ●だから(その理由)であるか、どうかは別として、漢字では、「感、即ち自分の感じたこと、喜びの気持ちを、謝、即ち、言葉(言、ごんべん)で射る、さながら弓矢を射るように。」と書く。
- ●即ち、感謝とは、嬉しい、喜びの心を、ただ自分で良かった、良かったと楽しみ、満足するのでなく、その喜びを、そもそもその喜びをもたらしてくれた人、それに貢献してくれた人に向けて、言葉で、更には態度で具体的に表わすことである。

(3)このように、人は、案外、良い状況の中でさえ、十分な感謝を表わさないものである。そして、しばしば、感謝を表わす前にあっと言う間に、その感謝の心を忘れてしまうというのが多くの現状・現実である。(木曾の山中で山賊に襲われて、通りかかった侍に助けられた商人の話)

⑷聖書は詩篇１０３篇２節で言う。「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」と。

２．また、「すべての状況」とは、「最悪の状況」をも含んでいる。

⑴それでも良い状況の中で、「感謝、感謝」と言うことは、何も誰かに言われなくても、ある意味で、比較的た易いことである。

⑵しかし、聖書が、「すべての」というとき、それは悪い状況、最悪の状況の中でも、という意味を含んでいる。

⑶その良き例が、前述の砂山節子先生である。彼女の例は正に最悪の状況であった。感謝できなくても、当たり前と言う状況である。

⑷しかし、神様は、砂山先生にもそうされたように、そのような最悪の状況のど真ん中に生きている人に、「感謝」することを求められるのである。

⑸なぜなら、悲しみの中で沈んでいても、そこからは何も生まれてこない。失望と絶望があるだけである。

⑹しかし、あの砂山先生のように、暗闇のど真ん中で感謝するとき天からの力が与えられるのである。

⑺悲しみは悲しみである。悲しんでもよい。喜べと言っているのではない。

⑻しかし、そこで留まってはならない。失ったものではなく、今目の前にある困難ではなく、これまで受けてきた、今受けているそのほかの様々な恵みを、一つづつ「数える」という意図的、意志的、理性的な行為が必要である。

⑼ここに生きる力の源がある。

II．第二に、聖書は、そのようなすべての状況で感謝する生き方は、イエス様によってのみ可能であると告げる。

A. 聖書は言う。18節「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」。

１．「あらゆる状況の中で感謝する」生涯は確かに美しい。そうなりたい。そうなるべきである。そのような生涯、生き方こそが、神様が私たちに求めておられる生き方である。

２．しかし、私たち自身がすでに知っているように、神様も、それが私たち人間の力ではできないことをよく知っておられる。

３．だから、聖書はここで言う。確かに、このような生涯こそが、神様が私たちに求めておられる生き方であるが、神様は、それが、私たちの力によってではなく、「**キリスト・イエスにあって**」私たちの人生に実現することを望んでおられると。

B. そもそも、「キリスト・イエスにあって」とは、クリスチャン生涯の鍵である。

１．しばしば聞くことであるが、「たとい聖書がそう言っても、それは理想だけど、そんなこと言われても、わたしには到底無理」とよく人は言う。(PJC のまり子さんの質問)

２．しかし、それなら「キリストは要らない」「信仰も要らない」。クリスチャンになる必要も、クリスチャンである必要もない。自分の力、自分でできる生き方、その範囲内で満足するか、少なくとも我慢すれば良いのである。

３．クリスチャンとは、自分ではできないから、キリストに頼って生きようとする生涯である。それなのに、多くのクリスチャンが、問題に、困難にぶつかったときキリストにあって、キリストに頼って生きようとしない。むしろ、

⑴余りにしばしば、「私にはできない」と、自分の力だけを見つめて立ち止ってしまう。

⑵イエス様にあって生きようとしない。イエス様への信仰を働かせようとしない。

⑶そして結局はクリスチャンでない人とそんなに変わりなく自分の力で生きるのである。

４．しかし、聖書は私たちがクリスチャンとして、クリスチャンらしく生きようとするなら、自分の無力さを認め、キリストにあって(よって)生きるべきことを繰り返し教えている。

⑴「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」(マタイ19章26節)

⑵「できるものなら、と言うのか。(神を／キリストを)信じる者にはどんなことでもできるのです」(マルコ９章２３節)

⑶「私(キリスト)の力は、(人間の)弱さのうちに完全に現れるからである」(Ⅱコリント 12章９節)

⑷「私は、私を強くしてくださる方(キリスト)によって、どんなことでもできるのです」(ピリピ４章１３節)

⑸「私たちは弱い」。だから、聖書は更に言う。ヘブル４章 15－16 節。

５．今日のテキストである１８節で言われていることも同じである。「キリスト・イエスにあって」とは、「キリスト・イエスによって」「キリストの力によって」「キリストの助けによって」「キリストに頼ることによって」「キリストに祈ることによって」、私たちの人生に、「すべての状況において感謝するという不可能な生涯が可能、現実になると言う意味である。

結　論

●だから、私たちが、状況に流されることなく、あらゆる状況の中で、感謝する人になれるように、イエス様に祈りましょう。イエス様にすがりましょう。イエス様に助けを求めましょう。

●そうすればできます。ある人が、仕事でもうまく行かないことばかりと言う一日を終えて、疲れ果てた気持ちで家路についた。ところが、夕方のラッシュ。更には、大雨で、夜の雨の運転は厳しかった。そんな時、車がパンク。やっとの思いで、路肩に車を寄せた。スペアタイヤを取り出し、タイヤ交換をしようとしたが、大雨だけでなく、通り過ぎる車による容赦のない水たまりからのスプラッシュ。心はズタズタ、イライラと不満と怒りで心は一杯。そんなとき、心に、「すべてのことにおいて感謝しなさい」のみ言葉が来た。彼の思わず言ったこと、「そんなこと無理です」だった。しかし、心にその言葉は響き続いた。ついに彼は屈し、感謝にならないような感謝の言葉をつぶやき始めた。しかし、作業しながら、気が付くと、彼の心は感謝が、目には一杯の涙があった。彼は、その日、感謝に満たされて家のドアを開けることになった。

●私たちも感謝しましょう。神様に、人々に。

●特に、まず神様に!!　ジャービスと言う宣教師のキリスト教パンフレット「世界で一番礼儀正しい国」：日本は人には世界一礼儀正しい。しかし、神様には・・・？